

第三編 學會志

序

學會の組織は學問研究の進展と共にあり、其處に行はれる會員相互の切磋が、教室における研鑽と相俟つて、學生々活の最も重要なる部門となるものである。特に大學にあつては、學術の蘊奥を攻究する立場よりして、その活動が注意せらるべきであり、文科大学創立當初の教育方針の中にも、各科目毎に一定の組織ある學會を有ち、教官學生相共に研究の發表、討論及び新刊圖書の紹介を試み、學生相互の知識の交換、増殖を期待したが、哲學科開講の翌年明治四十年二月教育學會の組織せられたのを初として、各科目の學會相次いで創立せられ、學生は諸教官指導の下に各自志す専門學術の研究に赴くに至つた。各學會の特殊なる活動は二篇に記述せる所であり、此處では其等の簡單なる紹介に止めて置く。

一

京都文學會 明治四十三年二月創立。同年四月より月刊「藝文」を發刊。一學一科に偏せざる文學部全體の綜合雜誌として、學術の研鑽の發表と共に、更に時代に接觸して思想界の歸趨を指導せんとし、研究、創作、趣味等各方面に世の注目を集めた。しかしその後次第に各科目の内容充實し來ると共に、夫々に於いて大小の學會が結成され、また研究發表の機關雜誌を持つものも生じ、「藝文」は漸くその最初の意義を喪失した。かくて昭和六年五月總目次刊行を限り、創刊以來二十二年の業績を遺して廢刊となり、その母體たる京都文學會も自然消滅する事となつた。

京都哲學會 本會の最初は、大正三年十一月の創立になり、從來哲學科の内部にあつた、哲學倫理學研究會、社會學會、心理研究會、教育研究會、美學會、印度宗教學會を綜合して、毎月一回例會を、年三度大會を開くことに定めたが、斯學の發展と共に會の組織を擴げ更に機關誌發刊の企てあり、大正五年二月發會式記念講演大會を開催した。哲學科を中心として、斯學に關係を持つ人々の入會を許した。會の事業として毎月例會、年二回大會を開催し、また月刊「哲學研究」を發刊するこ

とに定められたが、その中例會は間もなく行はれず、春秋二回の大會には碩學新進一室に會して斯學界の耳目を集めた。昭和二年よりは年一回開催せられて今日に及んでゐる。「哲學研究」は大正五年四月第一號を發刊して以來多數學徒の論說相次いで發表せられ、斯學研究者の指針となつてゐる。

史學研究會 明治四十年史學科の開講後程なく、關係教官の間に發起せられ、翌年二月始めてその第一回例會を開いて以後、隔月一回の例會と毎年一回の總會とを以て會規としてゐる。總會には東京その他の大學より講師を聘して特別講演を請ふ外、毎回史料の展觀見學等を催す例となつてゐる。本會は當初より單に學内に於ける研究機關たるにとゞまらずして廣く學外一般の同好者を糾合するを意圖し、役員の如きも當初は學内教官の外に、多く學外の士を交へ、會場の如き亦屢々女子師範學校、府立圖書館等多く學外の施設が用ひられた。その會合の席に於て發表せられた會員の研究業績は初め史學研究會講演集一―四並に史的研究(正續)として公刊せられたが、大正五年一月機關誌「史林」(季刊)の創刊せられて以後之に掲載せらるゝことゝなり、今日まで既に二十卷に及んでゐる。この

外總會に於ける講演に因んで、天正年間遺歐使節關係文書、大館持房行狀の特別出版をなしたこともある。

支那學會 明治四十年十月の創立に係り、支那哲學、東洋史、支那文學三學科所屬の教官學生及び學外同好の士を含み、廣く東洋學研究を目的とするものである。最初は毎月例會を催したが、大正三年十一月はじめて大會を催し、燉煌發掘以來支那學研究の機運昂まると共に會の活動も著しく躍進し、斯學研究の權威となるに至つた。

二

哲學茶話會 西洋哲學專攻生は最初は倫理學專攻生と合同して哲學倫理學研究會を持つてゐたが大正十年の夏より兩者分離し、純哲、西洋哲學史專攻生集まり哲學會を創め、大正十五年頃より哲學茶話會と稱して、會員の研究發表と批評とを行ひ、昭和三年西田教授退職の後は田邊教授之を指導せられて今日に及んでゐる。尙昭和六・七年頃哲學研究會と稱したが間もなく原に還つた。

西洋哲學會 昭和六七年のころ、西洋哲學史專攻生の間に組織せられ例會を開

催した。

印度佛教學會 明治四十一年二月印度學會創立せられ、同年三月宗教學會の組織成立し、爾來兩學會別に講演會を催したが、兩學講座は松本(文)教授擔任せられ、且つ學問の性質上共通の點多きため、四十二年九月合同し印度宗教學會となり、松本(文)教授指導の下に毎月例會を開催した。翌年五月榊教授梵文學講座を擔當せられてよりその專攻學生も本會に合同して盛況を呈したが、大正六年十二月波多野教授來任して宗教學を講せられてより漸く宗教學專攻者は分離し、梵文學研究者も同じ傾向をとり、大正八九年頃は單一の印度學會に還元した。然るに大正十五年三月宗教學第三講座(佛教學)設置せられるに及び、昭和四年六月より印度佛教學會と改名し、松本名譽教授並に羽溪、木田兩教授指導の下に毎月研究會を開催し、尙本年九月より梵文學專攻者まで合併して綜合的研究機關となつてゐる。

心理學讀書會 最初は心理研究會として明治四十一年二月創立せられ、毎月例會を催し、松本(亦)教授指導の下に心理學專攻者の研究及び親睦を計り、又時に大

會を開催した。四十一年十月心理學實驗室の竣成は斯學の爲め最も注意すべき出來事であり、爾來獨自の研究相次いで發表せられ、大正二年四月、實驗心理學會の創立せらるゝ機運を醸成した。大正三年京都哲學會創立せられた影響をうけて、本會も心理學研究會及び心理學讀書會の二者に分たれ、前者は大學院學生を以て組織せられ、後者は廣く專攻者を包含し、共に十一月第一回例會を開いたが間もなく前者は後者に合した。大正五年野上助教歸朝、次で教授に任せられ、その指導下に毎月例會を實驗室にて開催し今日に及んでゐる。

倫理學研究會、倫理學讀書會 明治四十二年十二月創立せられ、爾來毎月一回例會を開き又大會を催したが、四十三年十月、倫理學を擔當せられた西田助教歡迎の席上、哲學倫理學兩學科合同して哲學倫理學研究會と改めた。この事情については當時桑木教授が哲學及び倫理學兩講座を擔當せられ、研究室も合同してゐた事によるものである。大正二年藤井教授來任し、翌年桑木教授東京大學に轉せられて後を西田教授、朝永教授が受持たれたが學會の組織には變りなく、三教授出席して學生を指導せられてゐた。大正十年頃より兩者分離して倫理

學專攻生のみの倫理學研究會となつたが、昭和六年一月藤井教授逝去の後は和辻助教授後教授擔當し、また同年春より別に學生の間に倫理學讀書會があつて例會を研究室に開いた。和辻教授東大に轉するの後は天野教授之を擔當して今日に至つてゐる。

教育研究會、教育學讀書會 明治四十年二月の創立にかかり、谷本教授を會長とし、松本(亦)教授を顧問に戴き、學内の人々の外に、實際教育に携はれる人々をも銓衡して入會を許し、その實驗談を聽き、學理との調和を計らうとしたのである。大正二年谷本教授故あつて退職せられ、後任として小西教授、會を指導せられ、斬新の學説を以て人々を教へられると共に實地見學による指導を行はれた。尙昭和六年以來別に教育學讀書會があり、主として學生相互の研鑽に資してゐる。小西教授總長に任せられて後は野上教授之を擔當し、木村助教授亦之を指導してゐる。

美學會、美學讀書會 明治四十一年三月、美學美術史關係の人々、相互の研究のため組織し、松本(亦)藤代兩教授の指導を受けたが、深田教授歸朝の後は専ら事に當

られた。大正五年十月、會名を美學美術史研究會と改めたが再び美學會と稱せられるに至り、昭和三年深田教授逝去の後は植田教授擔當せられ同六年の美學讀書會は學生相互の研鑽に資し、此頃各學會に讀書會起る機運を醸成した。

宗教學茶話會 明治四十一年三月宗教學會として創立せられ、松本(文)教授指導の下に毎月例會を催したが、翌年九月印度學會と合同して印度宗教學會となつた。これは兩學の性質共通するものあり、尙松本(文)教授兩學講座を擔任された事による。大正三年京都哲學會組織せられたのを機として、大學院學生を中心とする宗教學讀書會成立したが永く續かず、舊の如く印度學會と合同してゐた。次で波多野教授來任して宗教學講座を擔任せられるに及び専攻學生は印度學會とは次第に分離の傾向をとつたが然し獨立した例會は開かれず、哲學會に抱攝されてゐた。最近に至つて、専攻生のみ、宗教學茶話會催されて研究發表を試みてゐる。

社會學會、社會學讀書會 明治四十二年四月米田講師指導の下に設けられ、當初は教室に於ける純理の研鑽に對し、政策に關する攻究を目的としたが今はその

色彩が失はれてゐる。大正三年に於て京都哲學會創立せられてより各學會の組織に變更あり、本會も社會學讀書會と改め、社會學專攻生のみ相集り、毎月米田講師私宅にて開催し、後學生集會所に移つた。大正十四年米田教授退職の後は久しく專任者なく藤井西田野上諸教授兼任せられたが、大正七年臼井助教任命以來其指導に當り、經濟學部高田保馬教授また種々盡力せられてゐる。

讀書會 桑木教授を中心とし、文科卒業生及び哲學科專攻學生有志、同教授邸に集まり學生の紹介、批評等を試みる打とけた會合である。明治四十二年秋、桑木教授歸朝後、十二月第一回開催せられ、爾來大正三年同教授の東大轉任の頃までつゞけられた。

月曜會 哲學科第一期より大正初年に至る卒業生の中各科二三名づゝ有志相集つて自由なる討論の間相互の琢磨を志した。大正三年十一月第一回會合あり、大正七八年の頃までつゞけられ、今日學界の中堅をなす學徒を多く育んだ異色ある會合である。

三

讀史會 本會は明治四十三年十二月二日故三浦教授を中心に創立せられ、國史專攻の學生、卒業生並に關係教官の凡てを會員とし、當初は主として史料の講讀を目的としたが、中比より會員の研究發表をも行ふこととなり、七八兩月を除いて毎月必ず一回の例會を開き、その中十二月は之を大會として講演の外に、併せて史料の展觀を行ひ、廣く一般に公開するを例とし來つてゐる。なほ別に隨時史料探訪史蹟踏査の旅をを試み、また學友會より囑されて「修學旅行京都史蹟案内」の如き圖書の編纂を行つたこともある。昭和五年十一月創立二十周年に際し記念事業として會員より醸出せる金四千參百圓を讀史會獎學資金として大學に寄附した。昭和六年六月三浦教授退職の後、西田教授の下に明治史研究會等の國史關係の學會を併合し、教官卒業生、學生すべてを包含する國史科の學會となり、會員の數約二百名となつてゐる。

京都帝國大學國史學會 國史專攻の大學院學生を中心としての卒業生一般の研究發表機關として昭和八年九月、始めてその第一回大會を開き、爾後毎年春季に一回宛公開の大會を催して今日に及んでゐる。

明治史研究會 昭和三年二月、學生有志の發起になり、三浦、牧兩教授を指導者として、廣く學の内外を問はず、維新史乃至明治史の研究家、同好者を糾合し、會員の研究發表を行ふ、外實歴者の談話等を聴取した。毎月一回の例會と毎年一度の大會とを以て例とし來つたが、昭和七年國史關係の學會を整理するに當つて讀史會と合同することとなり、同年五月第二十二回例會を最後として讀史會に合流した。

民俗學會 昭和二年十二月、西田教授をその指導者として誕生し、始めは民俗談話會と稱した。學生の外市中の同好者をも會員として相互の知識を交換すると共に、また諸方の民俗行事を見學した。後、名を民俗學研究會と改めて、民俗調査等をなし、一層組織的な活動をなさんとしたが、會名は、簡略に呼びならはされて舊名の民俗學會を稱するに至つた。月々例會を開き、近時は學生並に大學關係者を主とする會合になつてゐる。

東洋史談話會 昭和四年創立、東洋史專攻の學生卒業生並に教官を以て會員とし、毎月一回の會合を開く。東洋史專攻生増加の爲從來の支那學會のみを以て

しては研究發表の機會に不足するによつて、同會と並んで別個に設立せられたのである。

地理學談話會 明治四十三年一月小川教授の發起によつて開かれ、當初は外國雜誌、新刊圖書等の紹介等を主としてゐたが、大正三年ごろより名を地理學研究會と改稱し、會員の研究報告の外、屢、野外調査、見學旅行を主催し、自然地理學的事項の觀察の外に、人文地理學の一部として民俗學的資料の採訪をもなした。大正中期以後一時その活動の萎微したことがあつたが、昭和に入つて再び盛んとなり、同八年十二月には始めて大毎會館に於て公開の大會を開いた。名稱は耳馴れたところに従つて何時しか談話會の舊に復した。

西洋史讀書會 明治四十三年十月、第一回卒業生等の首唱によつて創められ、原勝郎教授の指導によつて、外國の雜誌を讀むことを主眼としたので會するものも敢へて西洋史専攻生に限らず、廣く史學科全部の學生に及んだ。初めは殆ど隔週毎に開かれてゐたが、原教授坂口教授逝去の後、一時中絶したが、大正十四年四月より再び正規に例會を催すこととなり、昭和八年十月以後毎年一回の大會

を開くやうになつた。

考古學談話會 考古學教室に於ては關係者が少數の爲特に日を定めて會合を催すまでもなく、隨時教室で茶を入れ教官學生相共に自由な談話を交へるの習慣が今日まで續いてゐるが、大正十五年ごろ民俗談話會の誕生等と氣運を同じうして、談話會を學生集會所に於て催したことがある。史學科に於ける同好の士の外、醫學部の人類學研究會關係者達が多く參會したが、昭和三年以後再び開かれなくなつた。

四

國文學會 明治四十二年十一月藤井、新村兩教授を中心とする學生の親睦會に胚胎し、文學雜誌の共同購讀及び作品の批評等をなしたが、その後漸次組織を完成し現在に於いては例會並びに毎年春秋二回の講演會を行つてゐる。一方藤井、吉澤兩教授を中心とする京都國語國文研究會では大正十五年十月以來月刊「國語國文の研究」を公刊してゐたが、昭和六年十月に至り國文學會自體の機關誌として同じく月刊「國語國文」を創刊し、また國文學科の同好の士の間にかねて組

成されてゐた、上代文學、平安朝文學、鎌倉室町文學、江戸文學、現代文學の各研究會は、昭和八年から齊しく國文學會の統轄に歸し、愈、發展の途を辿り、昭和九年十一月には國文學科創設二十五周年記念として國文稀觀書展觀及び記念論文集の刊行をなした。猶ほ隨時に澤瀉、瀨原兩助教指導の下に萬葉集歌枕旅行、俳諧旅行などを行つてゐる。

英文學會 英文學科に於いては初め學會を有せず、其折々に教授學生相會し、或は上田教授の私宅などにて懇談したが、漸く學會の必要の議起り、明治四十四年一月その第一回を學生集會所に開く。上田、厨川兩教授始め卒業生學生より成り、宛も大正初年の西洋文學旺盛期に際會し目醒ましき發展を遂げ、研究の發表に、作品の批評に、相互に裨益し合ふ事大であつた。その後昭和八年七月に至り、組織を新にし、石田教授を中心として機關誌「アルビオン」Albionを發刊した。猶ほその他現今有志の間に英語學讀書會あり、文法の研究をなしてゐる。

獨文會 大正四年一月創設。藤代教授らを中心に卒業生學生相集つて毎月例會を開いてゐたが、現在は成瀬教授を中心に春秋二期の懇親會を開き、別に昭和

八年正月に至り、成瀬、落合、雪山三氏を顧問として獨逸文學研究會創設され、季刊雜誌「カस्ताニエン」Kastanienを發行し、兼ねて隨時に文藝講演會を開催してゐる。佛蘭西會 大正十二年創設。太宰教授落合助教指導の下に讀書會研究發表などを行ふものである。

言語學談話會 大正五年十二月創設。新村教授始め言語學に關係ある教官卒業生學生及び言語研究に興味を有せる人々相集りて組織し、年數回の例會を開いてゐる。

イタリヤ會 大正十四年五月創設。新村、濱田兩教授を始め黒田正利講師、大賀壽吉氏等有志に依つて組織せられてゐるが定會員を定めず、事業としては昭和七、八年頃にはダンテの神曲を研究し、イタリヤ文化の紹介に努め、また本學部にイタリヤ語の講義が設置される以前大正十五年正月からイタリヤ總領事ガスコ(Gasco)氏及び黒田氏に依つてイタリヤ語講習會が開催され、種々の方面からイタリヤ文化の研究に進んでゐる。

近畿國語方言學會 昭和六年四月創設。新村、吉澤兩教授を始め學の内外の有

志を糾合し、近畿その他各地の方言を採集調査し、從來の國語研究の補助となし、傍ら郷土民俗の考察に資せんと抱負を以て、活潑なる活動を續け、例會を開くこと既に二十二回、また例年秋期大會を開くこと六回に及んでゐる。

文學會 文學科の綜合的會合にして明治四十一年九月教授學生間の懇親を計らん爲創始、爾後會合屢に及んだ。一方毎月二回學生の手になれる回覽誌を作り、和歌、漢詩、小説、戯曲、俳句、新體詩などを含み、相互の獎勵と批評とに供し、また親睦をはかつた。

文藝談話會 明治四十四年二月創設。哲史文三科を通じ、文藝に對して有する趣味を以て同志間に結ばれたる會合にして、上田、新村等諸教授を始め、廣く文藝に關する懇談をなし兼ねて相互の親睦を計らんとし、會合數回に及ぶ。

麗澤社 大正七八年の交、狩野直喜、内藤虎次郎、兩教授、西村天囚、富岡謙藏、兩講師を中心に、支那文學科學生及び一般有志の者より成り、作文研究の機關としたことがあつた。